

「日々の理科」(第 3114 号) 2023, -2, 14

## 「南岸低気圧による雪(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

この日は6年生2クラスの理科授業があった。東京で雪の結晶を観察できるチャンスはなかなかなく、6年生にとっては小学校での最後の雪になる可能性もある。子どもたちに聞いたら「観察したい!」というので、校舎の軒下で観察させることにした。



もちろん寒い日だったが、6年生の子どもたちも大喜びで校庭の軒下(ピロティ)で「雪見」をしていた。観察に必要なものは、「色の濃い布」と「虫めがね」だけである。布は特別に準備する必要はなく、服の袖や制帽で十分である。



東京の雪は気温が高い中で降ることが多い。この日も気温は+2℃もあった。辛うじて固体(雪)のまま降ってきたに過ぎないので、地上物に落ちると短時間で融けてしまう。袖に落ちたらすぐに見る必要がある。



ほとんどの子どもは、東京で雪の結晶を観察できるとは思っていないので、半信半疑という感じだった。



この日は気温が高かったので、きれいな「樹枝六花」の結晶はほとんどなかった。樹枝六花がやや融けたものや、結晶同士が結合してしまったものが多かった。



黒または紺のラシャ紙(色画用紙)も観察に有効である。布に比べると、結晶の設置面積が大きいので、すぐに融けてしまうが、受ける全体面積も大きいのでいろいろな結晶を観察できるのがメリットだ。